


## 論 文 要 旨

専攻名 (又は推薦専攻名)	地域イノベーション学専攻	氏 名	川見 夕貴	
学位論文題目 高等教育機関とコミュニティの協働の構造—プロジェクト型音楽活動を事例として— (英訳又は和訳：Structure of collaboration between higher education institutions and communities—A case study of project-type music activities—)				
<p>本研究は、実践現場の課題解決のための高等教育機関とコミュニティの協働の在り方について検討するものである。コミュニティとは、物理的な場の広がり（地域）を含む、互いに支援的な関係のネットワークを指す。</p> <p>筆者は、三重大学教育学部、同大学院教育学研究科の教育課程において、多様な音楽活動を行う中で、次のような教育に関する改革の課題を抽出した。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>I 特別な支援が必要な子どもたちの発達課題に即した音楽活動が少ないこと</li><li>II 特別な支援が必要な子どもたちの生演奏に触れる機会が限られていること</li><li>III 都市部から離れた地域では、子どもたちが生演奏に触れる機会が少ないこと</li></ul> <p>課題 I～IIIは、高等教育機関を核とした地域連携から見出した課題であり、我が国の現代的な教育課題でもある。そこで、実践現場の課題解決を図る研究方法としてのアクションリサーチと、学生教育である PBL 教育を融合させた三重大学 COE (B) プロジェクトによるアクションリサーチ的アプローチに着目した。</p> <p>本研究の目的は、三重大学 COE (B) プロジェクトが開発した 5 つのアクションリサーチ的アプローチのモデルのうち「総合モデル」を改善し、課題 I～III に関するコミュニティの課題解決を図るための高等教育機関とコミュニティの協働の構造を示すモデルとすることであった。「総合モデル」とは、教員養成における「理論・省察」(大学等)と「実践」(教育現場)の「往還」を示すモデルであり、大学教員が多様な役割を担うことを特徴としている。本研究では、まず、このモデルによるコミュニティの課題解決の可能性と課題を明らかにした。そして、新たな視座として、実践現場において「当事者」自身が多様な役割を担い、自律した実践・活動を行うことを展望した「協働モデル」へと「総合モデル」を改善した。具体的には、ウィリアムズ症候群 (Williams Syndrome) の患児・者とその家族を対象としたプロジェクト型音楽活動 (“音楽キャンプ”) を事例とした。</p> <p>序章では、本研究の動機、目的、方法について述べ、本研究の全体像を示した。続いて、第 1 章では、「総合モデル」が教育機関とコミュニティとの協働において有用であることを、「愛知サマーセミナー」と大鹿中学校歌舞伎学習の事例を通して論じ、その可能性と課題</p>				

続紙 有  無

氏名	川見 夕貴	
----	-------	---

を明らかにした。「総合モデル」は、PBL 教育を理論的背景としたモデルであるが、学び合うという深層構造は、2つの事例においても共通していることを見出した。

第2章では、「総合モデル」に該当するプロジェクト型音楽活動(“音楽キャンプ”)において、大学教員の役割を軸とした協働の変容を明らかにした。「総合モデル」に関する PDCA サイクル (Plan - Do - Check - Act/Action) を検討した結果、3段階の協働の変容を経て、開発当初に重視していた PBL 教育(教育養成型 PBL 教育)から、対象者の自立・自律支援に重心が移行していることを明らかにした。そこで、これに基づき「総合モデル」を改善し、「協働モデル」とした(図1)。

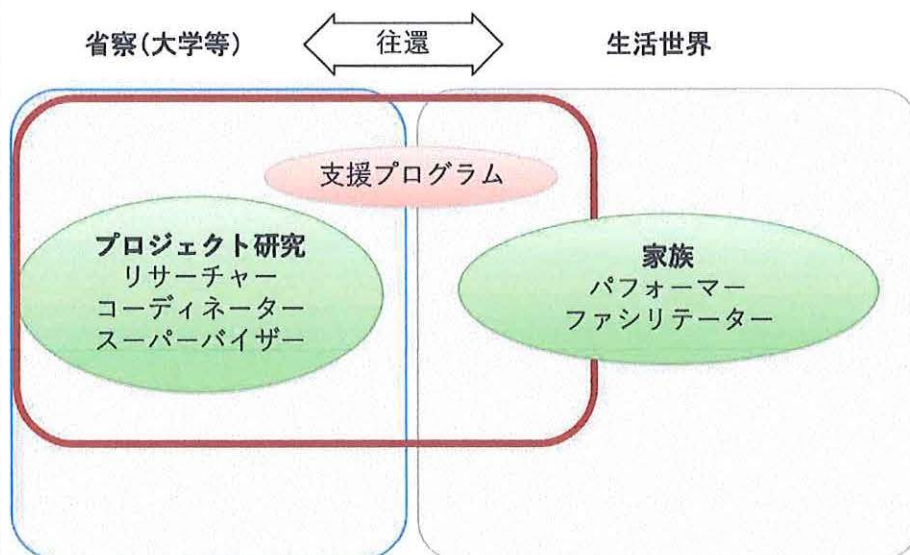



図1. 協働モデル

「協働モデル」の特徴は、高等教育機関における「理論・省察」と対象者の「生活世界」(実践)との「往還」である。これは特に、異なる地域で生活する対象者が形成するコミュニティであっても、生活世界における協働を目指すことを意味する。さらに、本モデルでは「当事者」自身が活動を促進し、自律した活動を展開することを展望している。協働において、大学教員は、最新の研究成果を基に活動全体をマネジメント、スーパーバイズすることで、活動・実践を支援することになる。

第3章では、「協働モデル」に基づき、課題Ⅰ～Ⅲを解決するプロジェクト型音楽活動(“音楽キャンプ”)を企画し(Plan)、実施した(Do)。計量テキスト分析による評価(Check)を通して、新型コロナウイルス感染症拡大に伴うオンライン実施という形態でありながら、コミュニティの課題解決を図るモデルとしての「協働モデル」の有用性を明らかにした。

氏 名	川見 夕貴	
-----	-------	---

終章では、課題Ⅰ～Ⅲを解決するモデルとしての「協働モデル」の有用性をパフォーマンス評価によって明らかにした。そして、高等教育機関がコミュニティの課題解決に果たす役割として、研究の支援とその推進、対象者を支援する場の継続的な創出、コミュニティや実践についての記録やデータの蓄積を見出した。

以上、「総合モデル」をコミュニティの課題解決のための高等教育機関とコミュニティの協働の構造を示す「協働モデル」へと改善し、その有用性を明らかにした。